



Title	総括討議
Citation	子ども発達臨床研究, 6, 57-66
Issue Date	2014-12-18
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/57572
Type	bulletin (other)
File Information	AA12203623_06_57-66.pdf



[Instructions for use](#)

問宮：石岡さんの一番最後のスライドなんですけれども、グレート・リセット的なものの噴出の中で、もう一度当たり前な原理に立ち戻るといのは、これからものすごく難しい段階になってくると思います。展望は見えてくるのですか。

石岡：僕の発表というのは、development を、いかにより良い方向に展開していくかという議論の「手前」のところの発表だったかと思えます。実際には、urban development にしても human development にしてもいろんな development が政策的にも展開している中で、そこで語られる development を一度、解剖してみる必要があると思えました。共通してあるのは development と言いつつも、白紙に一回戻して、白紙に戻した状態のところには何かを植えていくような、そういうふうな様相があるのではないかと思いました。そういうなかで、グレート・リセット的なものも出てきていると考えられると思います。それをどう乗り越えていくかという問宮先生のご質問にはすぐに答えるところまで、僕は行けてないのですけれども、development という言葉を実際に使って行われている政策だったり、実践みたいなものが共通に前提としているものはあると思うので、そのこと自体を「白紙待望型社会」として、名指しておきたいと考えました。そうすることで、少し議論の筋道の見通しが良くなるのではないかと。その現状をどう乗り越えていくかは、まさに皆さんと一緒に考えていければと思います。

問宮：亡くなった加藤周一さんに『最終講義』という本があって、立命館大学その他で講義されたものです。あの加藤周一がですよ、あえてマルクス主義に触れていて、ある程度社会主義的経済をうんぬんしないといかんのじゃないかというふうに、2008年ぐらいに言っているところがあります。多国籍

企業が勝手なことをし始めるとある程度その辺のこともしなければいけないんじゃないかという思いがあるんですけども、そう思いませんか。

石岡：少なくとも1990年以降ぐらいまでは、2つの大きな価値潮流が拮抗する中で第三世界の問題があったわけです。90年代以降ぐらいから2000年ぐらいにグローバル資本主義になってくる中で出てきた動向と、私の報告はどこか連続するかもしれません。今の間宮先生の話には答えづらい点がありますが、話を時事ネタまで広げていくと、今ウクライナがあのようになっているという事も、欧米なのかロシアなのかという話ではなくて、その裏側には間違いなく多国籍企業をはじめとした資金ルートがあることは明らかです。だからそういう、ウクライナのこと、ロシアはけしからんという形になると、更なるグローバル資本主義の餌食になって行くだろうということは間違いなさそうという所もありますし、現実と異なるところで切り結んだ形で、こういう時代はあるのではないかと思います。

辻：石岡さんは、他の報告を聞いた上で development という概念を使って議論をしたら、どういうふうな有効性があるかと思われませんか。

石岡：今日聞いていて思ったのは development というのが、自分の生得的な身体が何かに向かって行くというふうに内発的に出来上がってくる過程の問題と、もう一方で社会的な価値として現れてくる問題の、このふたつの相克にあるという点です。川田さんの話にもありましたけれど、「1歳になるのにまだ歩けないの」とかいうのは、それは当人の内発的な問題というよりは、社会的な外から見た枠組みに沿ってそれが、室橋先生の話にもありましたけれども、平均像にいつてないみたいに措定されるわけですよ。development を考えるということ

は、そういうふう人間を特定の形でマネジメントしていくとか、管理統制していくようなところと表裏一体にあるところ、非常に見えてきたと思うんですね。その点から考えると、川田さんの報告の中で、「異年齢カップリング」というのは面白いなと思いました。私の息子が保育園に行っているのですが、「2歳だとこんな感じで」みたいな枠組みは、やはり息づいています。2歳って言ったって、まだ生まれて2歳ですから、5月生まれと9月生まれの差異の4か月は結構でかいと僕は思うんですけども、でも「2歳だから」という感じになる。そうしてみると、「異年齢カップリング」というのは学年っていうものの不思議さだったりとか、3歳児とか4歳児とか1年生とか、学年の不思議さみたいな問題が見えたりとかして、その辺を捉える可能性を持った概念だなと聞いてました。また「異年齢カップリング」というのを社会経済的なことと絡めていうと、北海道の農村部に行くと、(人口が少ないために)保育園で、同い年の2歳児とかあんまりいないですから、2歳と5歳と5ヵ月とかいう形でやっているわけですよね。北海道のいろんな保育現場から見ても、「異年齢カップリング」から考えていくと、色々な可能性があったり、これまで不可視化されていたものが可視化できるんじゃないかと思うんですが、その辺、川田さんどうでしょうか。

川田：先ほど休憩時間にトイレで石岡さんともお話ししたんですけども(笑)、石岡さんもそうだし、他の先生方もかなり共通する部分として、今の支援が上手くいかないことが引き起こしている困難性というのは、管理的な観点から逆説的に構築された「標準」だったり、「普通」といったものを、何か人間本来であるかのように見てしまうことによるがんじがらめ、自縄自縛みたいなものなんじゃないかなと思います。保育所とか

幼稚園とか学校もそうですけれども、基本的には都市化して幼稚園の規模が100人超えるとか、保育所が100人超える規模になったときに初めて、1歳児クラスというものができるようになるわけですよね。長い人類史の中では、1歳児が20人とか25人とかで集団生活するなどという社会は存在していなかったわけけれども、この100年ぐらいの間に普通のことのようになってきた。

1歳児は噛みつきとかひっかきが多すぎ多いです。保育園の先生たちは噛みつきとかひっかきはどうしたらなくなるか、研究者も噛みつきやひっかきなくなるための環境構成とかを考えるわけけれども、これも実は、相当転倒した考えなのです。そもそも、1歳児だけが20人も集められて集団保育を受けるということそのものが、彼らにとって欲求や衝動として現れる自我の逃げ場がないんですね。ところが、これが10歳とか12歳ぐらいの子どもとカップリングしていると、いっぱい逃げ場がある。一方、10歳や12歳の子は、大人や同年齢、同輩集団の中では自我の逃げ場なくなるんですね。したがって大人との間では、反抗という形で発露する、実現するわけです。1歳や2歳の子に対して、蹴落としたりとか抜け駆けとか、反抗とかですね、そういうような形では自我が発露しないわけです。10歳とか12歳の子どもたちにとっても、小さい年齢の子どもたちというのは違う自分の姿というものを実現させる重要な契機になるわけです。1歳の子どもにとっても10歳の子どもにとっても、違う自分の姿というものが経験できるわけけれども、そういう契機が剝奪されるというのが、現代の年齢別(保育・教育)という問題の一つの隘路なのかなと思っています。

同じ2歳とか14歳でも相手の年齢期によって見せる姿が異なるであろうというこ

とが考えられるので、今の発達心理学でいう発達、例えば10歳はこういう発達という姿は、基本的には学校の環境の中で同輩集団で競争的な環境に置かれた10歳の子どもが見せる姿を標準と措定していると考えられるのです。これをもし10歳の子どもたちを異年齢の集団の中で日々生活するような環境に置いたときには、全く違った形で10歳が記述されることになるだろうし、もしかすると10歳を単体で記述することそのものが無効になるかもしれないと思っています。

もちろん現状の、さっきの間宮さんの質問にもありましたけど、現状の学校教育の枠組みの中で、全く荒唐無稽なことを言ってもしょうがないのですが、ここ数年、講演依頼を受けるテーマ中で、乳幼児の発達の本来が分からなくなってしまったので、もう一回本来を学び直したいという依頼はけっこうあるんですね。でも、その時に期待されている本来とは何だろうか。2歳の子どもが25人とかで、同一年齢で集合しているような中で実現される2歳の姿ということなのか、ということも問わなければいけないくらい管理的な視座から子どもを見てしまっているというふうに思っています。

宮崎先生に伺ったらいいのかな。発達の単位というのは学術的な分析の単位の問題なのか、実践的な単位として考えるのかという所で、両面ありうと思うんですけども、宮崎先生がおっしゃったのはどういう意味でおっしゃったのでしょうか。

宮崎：両方あります。さっき川田さんが言ったように、今我々が発達と考えているものは、管理上の必要性から作られた社会的標準ですよ。それが、本来のものであるかのように転倒してしまっていると言われていて。私もそう思います。本来のものとは何かというのは確かに難しいのだけれども、

今日の皆さんの発表を聞いていると、人間と自然の関係であったとしても、人間と人間の関係であったとしても、何らかのつながりを持ちながらでないと人間は存在していない。他者性といっていい。人間存在の根本的なあり方は、個体だけを取り上げてしまうと過度の抽象になってしまったり、その個体だけを取り出してそこに支援者が、間宮さんが言われたように、二者関係で何らかの支援を行えば問題が解決できるようなアプローチの仕方をすると、それは人間存在の根源的な在り方とは違う形にならざるを得ないと思うんですね。だとすると人間存在のあり方そのものをどう捉えればいいのか、その時の他者との関係、自然との関係、何て言えばいいかな、表現が難しいんですけどもね、絆と言ってしまうと薄っぺらいことになってしまっていますが、つながりの要素、南方の言葉でいくと「縁」になってしまうのですが、そういう所を含めたエコロジカルなつながりの要素を実体として捉えるならば、人間が変化したときの起点になるし、単位になる。実態がそうであれば、理論的に捉えるときの分析の単位もそれに応じたものになっていかざるを得ないのではないかと思います。

川田：ありがとうございます。その時に、何と書いていいかわからないんですけども、「縁」などといって生態学的に考えるということは、ある意味機能的に物事を考えるということじゃないかと思います。つまり、最初にルールを設定して、そのルールの下で線引きをするというのではなくて、あるものとあるものがどういう関係になっているかという、ボトムアップに記述するというスタイルになると思うんですよ。しかし教育、あるいは人間形成というのは基本的にかなりトップダウンのもですよ。Developmentの単位を再設定するということは、石岡さんの報告でいうと、新たな

ルールの策定を行うということが、不可避なのではないかということが想像されて、誰がどういう権利で新しいルールを策定できるのかという所で、心理学者としては「？」となるんですね。

宮崎：私もその辺のところを考えていたんですけども。教育実践という言葉がありますよね。さっきの保育実践でもそうなんですけれども、1歳児だけ集めて、そこで噛みつきがおきて、何らかのトラブルが発生する。それは加藤さんの言葉の意味と同じかどうか分からないけれども、「抵抗」、ちょっと違うかな、矛盾が表れているわけですよね。そこに現れた矛盾がすぐには分からないわけです。分からないけれども読み解いていく中で、支援者の側も自分が前提にしていた発達観、自分が正しいと思っていた科学的な在り方、それを問い返されることになるわけです。南方の話で出てきた、近因と遠因という、近い原因と遠い原因というのは、我々はすぐに遠くを見ることはできないし、すぐ近くを見ることしかできないのだけれども、近く現象はある種のリニアなモデルで、本来こうなるはずだと切り取ることが可能である。あえて言えば切り取っていいと思うんです。しかし、そうやって切り取った時に必ず矛盾が表れてきて、説明できなくなり、つじつまが合わなくなってしまう。そのこと自体が我々の切り取り方自体を反省させ、省察させる契機になって、そこから徐々に見えてくるものが、遠因に当たるところなのではないかと思うんですね。実践的には試行錯誤であり、プラグマティックに聞こえるかもしれないけれど、実践の契機を抜きにして、我々の認識の発達のあり方とか、認識の枠組みの転換のあり方は考えられないし、「？」とならなくも、実践の中で探求していくことによってその可能性は開かれるのではないかという気が、私はするんです。

ゲーマン：教育文化論のゲーマンです。言葉と発達の関係性とかについて考えていたんですけども、メディア・コミュニケーション研究院の方では、外国人児童生徒の日本語取得の研究がありますが、この図式の中にはどのように入るのかを考えたりして聞いていました。私自身は、先住民民族を対象とした研究をやっているんですけど、ニュージーランドのマオリ民族だと我々はマオリの教授法式によって学習をする権利があるんだという言い方をします。つまり、文化的学習教授の方式とアイデンティティ形成、マイノリティとしての自尊心と開発的な、あるいは経済的な進展との関係性をみる必要があるのではないかと思います。

またぼく自身、日高管内のある小学校のアイヌの子弟たちの教育ということに焦点をあてフィールドワークを行ってきたのですが、その町の職員が、この子どもたちの様子だけでは文化伝承を捉えきれるとは思っは大間違いなんですよ、と。もっと視野を広げなくてはいけないというふうに言われたことをきっかけに、いろんな年齢層のアイヌの人たちを見るようにしようとしたんですけど、成人の発達というのを今日の議論の中にどう位置づけられるかということも考えさせられました。

間宮：私ね、今日発表させて頂いた中で、この年になって、『これはいいな』と思ったのは、三角形、「キャサリン菊地理論」とこれからいうけれども、自分たちが支援する、そして支援される人がいる、勿論精神分析などには二者関係、三者関係のことがあるんだけどね、おばちゃんとして三人目にいるということが大変重要なことになるということに気が付いたことです。子どもだってカップリング理論といったけれど、トリプル理論の方がいいのではないですか。三角形で考えられないのでしょうか。

川田：カップル couple というのは必ずしも「2つ」を意味するわけではないので、3つの年齢期の組み合わせも入ってきます。三角形の構造は重要で、経営学などでは随分前からコミュニケーションの結束度の高い構造というのは三角形の数がどれだけ多いかということで分析されてきたので、おそらく三角形の構造でコミュニティの強さを見るということは、その通りなんだろうと思います。それを支援の構造の中でということになると、会社の中でオフィスのこととは違うので、また少し違う議論が必要なのかも思いますが。

私の話で言うと、確かに言われてみると先ほどの写真の中で、10代の子どもがいて2歳の子どもがいて、間に4、5歳ぐらいがいるんですね、かなり自立度が高い子どもですね。さきほど幼児期後期と幼児期前期と書いたのは結構理由があって、都市化していない社会の中では、5歳以降というのは周辺の労働の担い手にもなっているんですね。初期労働の担い手になっている人たちと、生殖が抑制されているけれども、かなり高度に労働に組み込まれてくる10代の人たちと、労働の担い手も、あるいは乳飲み子ともまた違うかたちであそぶ人たちとして認識されている幼児期前期、2、3歳頃。ここは加藤さんのデータにもありましたけれども、特徴的な年齢期だといえます。三角形で発達を考えると、理論的にはいくつかの三角形の典型というものも考えられると思っています。

宮崎：ゲーマン先生の成人の発達の方をどう捉えるのかということと関わって、加藤さんに伺いたいんですけど、できるのにさせなくしているという話がありましたね。社会的にある種の制約を課している、そうすると逆に制約を乗り越える形で、ある種のクリエイティビティが生まれてきて、制約を乗り越えて、報告では大きな波のようなも

のを乗り越えていっている図がありましたけれど、制約を課した者は何を考えるのか。それによって、制約自体を、抵抗を差し出した側自体の自らの抵抗の与え方について反省を迫られていくのか、あるいは社会的に作られた管理的な標準の発達の中におさめこまれてしまうのか、そこはどうでしょうね。

加藤：制約を受けるから、能力が発達すると考えたときに、その能力が伸びきった時には、もはや抵抗は、抵抗として感じられなくなることはあると思います。抵抗を加える側がどう変化していくかというよりも、人間が成長していけば、例えばある時期の子どもにとっては、抵抗と見えなかったことが、新たに次の段階では抵抗として見えてくるみたいなことはあると思います。例えば、私がやっている領域で言えば、抽象的な力が身につくということ为例にするなら、例えば、多くの人は高校、大学生になって初めてマルクスなど、抽象的な理論書を読むわけですね。その時、ある人にとってみれば、マルクスは知的格闘の相手になって、つまり、抵抗として現れるわけですね。つまり、新しいフェーズに入ったことによって、はじめて抵抗として現れてくるものがあるということです。相手がどうというよりも、自分が変化すると同時に、世界は多様ですから、必ずそこには何らかの抵抗が表れてくる。教育というのは、抵抗を人為的に配置していくシステムであるわけです。これは別に自分のオリジナルな話なわけではなくて、例えば、セガンという障害児教育の祖と言われる人がいます。彼の理論などは、どういう抵抗を系統的に与えるかということを考えることで、障害児に対する教育を組んでいきましょうという発想をもった理論です。例えば、これは定型発達にもあてはまって、乳児で言えば、平地ではハイハイしないが、坂道に置くと、

ハイハイが始まるとか、押されると押し返してしまうとか、身体に抵抗を感じると力が発揮されるというのは、かなり原始的なものとしてありそうです。別に思春期だけの話ではないのですが、思春期は特に外との衝突という形と、身体的のみならず、心理的にもいろいろな抵抗が加わりやすくなる時期なのではないかと思います。答えになっているかどうかわかりませんが、大人の発達ということに関して言えば、大人には大人のフェーズがあるのではないかという感じがして、思春期から捉えると、大人の発達ってよく見えていないんですけれども、今日出ていたジェネラビリティ、子を育て、親になるということとかは、非常に大きな発達の抵抗だと思います。中途半端な、回答で申し訳ありません。

宮崎：質問が抽象的でした。さっきの私の理解だと、加藤さんが言ってくれたように、発達概念自体が転倒性を帯びてしまっているというのが今日の共通した理解の仕方だと思っています。発達という言葉自体が含んでいる矛盾。そのことと関わって、ある種の抵抗を乗り越えて発達していくということを考えたときに、私が言いたかったことは、適応という概念ですね。既存の社会とか既存のマジョリティの側がスタンダードだと考えているのに、吸収されてしまうような発達にとどまってしまうのか、マジョリティのあり方そのもの、つまりマジョリティが考える発達概念そのものを批判するようなモメントがどのように生まれてくるのか。それは development という概念自体が転倒性を持っているとすれば、転倒性そのものを明らかにして、再構成するようなモメント、契機がどこから生まれてくるのかということと同時に考えないと、development 概念自体がディヴェロップしていくというか、そういうものとして考える必要があるのではないかという気がしてき

て、そこで抵抗という概念が使えるかもしれないと思ったのです。加藤さん何かありますか。

加藤：ちょっとよろしいですか。例えば川田さんが言っている、発達が転倒していると言った時に、僕はどう考えているかというのと、転倒を直せばいいという発想ではないです。

何をもって転倒しているのかというのは実は言えなくて、そもそも転倒しているものであると。その時に例えば、石岡さんの話のグレート・リセットとかにも関わりますが、リセットとはいっても、なかなか完全にはリセットされないんじゃないかと思うんです。ギリギリ、それでもひょっこり出で来る人がいて、そこを別の形に再構成してくる人たちが出てくる。これが多分おもしろい。石岡さんが出してくれたマニラの人たちや子どもなんかの事例も、たくましいと見るのか、可哀そうな人と見るのかによって、随分変わってくる。そういう意味では、どんな形にでも発達は起きてくるので、それを発達として見れるか、見れないかは研究者の問題で、理論をどう組み替えていくのかということが大切かと思えます。その時に今みたいにできることを増やしていく＝発達というように、古典的な発達観だけだと、マニラの人達の発達みたいなことは捉えにくくなる。あるいは思春期の発達ということが変な形で捉えられてしまう。ここを転換して、変化ではなく、停滞をとらえる理論でみれば、違う形で別の発達の可能性を記述できるかというのが私たちに課せられた理論的課題だと思えます。そして、それを分かりやすく伝えていかないとは実践には転換できないと思っています。

石岡：今の宮崎先生に加藤さんへの質問であったりとか、働くということに対して制約をかけているという所と関係してひとつ。さっ

き川田さんから管理の話が出ていて、その時に、管理は管理でも集団管理と個体の管理とがあると思うんですね。今、私は2歳児の子育てしていて、上の子は小学校2年生なんですけれど下は2歳で、この子のおむつをどうやって外すか。北海道は寒いから厚着をしていて漏れると大変なんですよね。そこで着るものが少ない夏の間には本州よりも短い期間で成功させなければいけないっていうので、次の夏にはいかにはずすかと着々と準備をしているところです。ですけれども、これも発達ということと同時にしつけとか、ある制約を課しているわけですよ。そういう意味では個体のレベルの管理なんだと思うんですけれども、さっきから問題になっているのは、様々な人々や子どもたち、これを識別して分類して何かの効果をエデュケートすることで、集団管理の技法として出てくる。どちらも制約はかけているのだけれど、おむつを外すという個体的な管理のものはちょっと違った、集団管理のレベルみたいなものがあって、実は今の development で考え付くのは、集団管理が最初にあったものが後々個の何々の「発達」という形に言い換えられているという、そういうふうな議論として受け取りました。要は、今の話は、転倒というのをもっと精密に見ていったときに、集団のマネジメントの問題と、個体のマネジメントの問題があって、集団のマネジメントの問題が条件の大きな基底的部分にあって、それが今のいろんな development の問題を考えていくときの根っこにあるのではないかとこの辺のころは発達心理学の見地からいかがでしようかね。

川田：発達心理学が発達心理学としてある程度地盤を固めたのはピアジェだとすると、ピアジェはむしろ集団的教育に対する懐疑が

あったのではないかと思います。個というものを潰してみんな同じようなものにさせる学校教育なるものに彼自身が反発していたフシがあるし、学校よりも博物館に出入りする中で研究者としての地歩を築いた人ですから、個体の能動的な環境との相互作用を重視したんですよ。ピアジェは基本的に事例研究なんですよ。個の変化を追跡するというところが、これも転倒があって、いつの間にか標準的な「何歳には〇〇」というスタティックな言い方が広がってしまった。

ピアジェは哲学的な認識論を批判するかたちで発生的な観点から認識論を構築して、それがいわゆる発達段階論として知られるようになった。このとき、ピアジェは年齢的な標準性は重視していなかった。彼が重視したのは順序性なんですよ。年齢を求める発想は「アメリカ的問い」であるとピアジェは言っていたそうです。ピアジェは発達には順序性があり、機能的に分化してより高次に統合するというプロセスを繰り返して、認識システムが質的な変化を遂げていくことを理論化した。順序性は存在するといったけれど、そこに年齢を当てはめて、一対一で見るとような見方はアメリカ心理学的な翻訳であるということです。ピアジェは基本的にそうしたアメリカ的問いを認めていなかったと思いますが、その勢いたるやまじいものがあつた。日本でも戦後GHQ占領下で、文部省関係の文書の中だったと思いますが、ピアジェの発達段階における標準的な年齢に基づいて教育階梯について言及するというような議事録だったかを読んだ記憶があります。日本では集団（一斉）教育の段階と方法において、ピアジェ発生的認識論の標準的な年齢段階のところばかり注目されたような気がします。繰り返しになりますが、本当はピアジェは個人が自律的・能動的に環境と相互作用

する中で自らの認識システムを高次化させるといふところを強調したはずなんですけどね。発達心理学と教育政策の関係は、結構複雑に転倒していて、なかなかそこは難しい、一枚岩ではないなと思います。加藤さんどうですか。

加藤：川田さんがおっしゃったとおりだと思います。教育における発達理論というのは、集団を前提にして再構成された理論だと思います。ただ、だからといって、それがいけないことではないと思います。教育の中では集団のなかで子どもたちをどうしているかとトップダウンで考えるわけですが、それでもそこをはみ出す人間がいるということが面白い。思春期でいえば、澁谷知美さんという社会学者の方が、『立身出世と下半身』という本を出していますが、それを読めば、明らかに近代の学校というのは男子生徒の性管理をどうするかが、1つのメインテーマです。だから性的に放蕩していないか、性病にかかっていないかということを検査するわけです。大学入試でもそういう検査があって、性行為の有無や履歴が人生を変えられちゃうぐらい、性的身体を管理していたわけです。それでもありとあらゆる手を使って、昔の学生さんも性的な世界に走る、あるいは妄想をたくましくしていくわけです。そういう性管理との抵抗の中である種、少年・青年たちは発達していく。だから抵抗＝ダメ、なくせ！と言いたいわけではなく、そういう抵抗の中で発達は多形的に生じていくんだろうなと思います。

ところで先ほどの紹介した進化論の元ネタになっている研究のデータでいうと、私の仮説としては、思春期が先に出て、その後幼児期が出てきて欲しかったんですよ。こうなるとこれまで乳幼児期が中心だった発達理論に対して、思春期・青年期の優位性が言えるわけですから(笑)。ところが残

念なことに、進化上は幼児期が先に生まれてくる。そこでなぜ幼児期が生まれることで、思春期・青年期が生まれるのかを考えてみると、恐らく幼児期のまだ労働には使えない者たちをどう管理するかという問題が出てくるのだと思います。そこで若者たちに何とか管理させなければいけない。ところが、この若者たちがすぐに子どもを作っちゃうと、今度は乳児の対応に追われるわけで、幼児の管理の担い手がいなくなってしまう。だから性を管理し、なかなか大人にさせない、思春期・青年期という時期が形成された。これは1つの物語で、ほとんど妄想ですけども、多分、進化心理学者なんかはこのように説明するじゃないかなと思います。この話に関しても、集団で生活するという前提があって、集団のなかだからこそ制約や抵抗が用意される。そして、そこに発達段階が生まれてくるという流れで発達を記述できるのではないかなと思います。人間が集団を形成する社会的な存在であるからこそ、発達段階が生まれる。この部分については社会学者—発達段階を語る社会学者はあまりいないと思いますが—とかなり共同できるのではないかなと思います。

伊藤：そろそろ終わりの時間が迫ってきましたが、水野先生、室橋先生、今までの議論を踏まえて、何かコメントなどがありましたらお願いしたいと思います。いかがでしょう。

水野：今日私が与えられた、体力科学的な見方からというところで、話の中で一番ぴんときたのは、川田先生だと異世代カップリング、加藤先生だと抵抗という話が出てきました。あと地域があるんだけど、抵抗というと体力科学的にはオーバーロードのトレーニングと言って、トレーニングの効果を高めるためにはちょっと難しい事をやっていく、それは平常の力になって更に次へ、

体も心に対するストレスも同じような形なので、今までの生い立ちというか生活の中で、子どもたちの自然の中でそういう抵抗を上手く利用しながら発達してきたのかなと思えるところもあるんじゃないかなと思うんです。現在、若者が生きづらさを持った者が多い中で、生きづらさを持ったニートやフリーターとか早期離学者とか含めて、何が生きづらいのかと聞いたとき、安心できる場がない。安心感を持てる仲間がない、コミュニケーションが上手くいかないとか、上手く取れないとか、共通の言葉が持てない。あるいは、達成感を持ってない、自己高揚感がない。おそらく、どの世代にも共通して出てくる言葉なんですね。体の発達、心の発達と考えたときに、こういう力はどこで作ったのかなと思った時に、ひょっとすると学校の後に遊びまわっていた放課後の時間、非常に重要だったんじゃないのかな。そこで異世代カップリングというのが出てきて、異世代の集団の中で、兄貴分がいて子分がいてそういう中で出来そうもないちょっと難しそうなことをワクワクドキドキしながら目いっぱい遊んでいたと思うんです。そんな時期がかつてあったのではないかな。地域という言葉も、今は治安の問題もあるし、環境をきちっと保てとするのであれば、地域ぐるみで、もしそこが発達にとって非常に大切な局面であったとするならば、どうそれを復元していくか、同じような機能を持たせる集団をどう作っていくか、環境をどう作っていくか。支援というのは、単に子どもたちが何ができるかではなく、環境をきちっと整えてやると、自動的に子どもたちが獲得して行ける、そういう所を持っているのではないかなと思います。最後一つ、宮崎先生になんとかまとめたいのは、発達支援学が始まったのは、部局横断で新しい学問構築が可能かという、教育イノベーションが

可能かという所だったんですよね。3年間、何かその方向性が生まれたのかということ、それを柱に教育学研究院に大きな大型予算が持って来れるのか、これがまた一つの大きな柱だったんで、そのあたりのことを最後に……

室橋：加藤さんが言われた抵抗というのは重要なキーワードになっていくかと思います。そのことに関して少しお話をしたいと思います。ハードルというのは発達の上でとても重要な問題だと思うんですけども、学校教育の中で一律に何年生だから、このハードルといった形で用意されてしまった時には、超えられない子どもたちが出てくる。発達の多様性ということを考えれば、その子のその時期に応じたハードルが微調整されていく必要がある。それができない現代的状況で、教育をするという難しさと限界がそこに出てくるのであろうと思います。ハードルを乗り越えていくときに出てくる重要な要因は、「予測」あるいは「期待」だと思います。ハードルが乗り越えられそうだという「期待」がその子に立った時に頑張るということができ、これは無理だという「予測」が立った時には、いくらがんばったとしても、次第に自己評価が下がってしまうわけです。その子がどう「予測」するか、「期待」するかが重要です。まさに「予測」というのは人の持つ最強の認知能力であるわけですが、「予測」の能力によって、社会の中で生きる難しさを獲得することになった、ということでもあると思います。その子がどういう「予測」をしているかにあわせて、ハードルを調整してやれば、その子の力を伸ばすことが可能になるだろう。そういうことができるかどうか、が問われなければいけない。発達を考えるとときに、重要になってくると思っています。

今日のシンポジウムができたのは、この3年間の成果であると思います。発達、

development 概念というキーワードで、違う領域の先生たちが集まって話すというのは、とても貴重な機会であったし、3年間の成果だと思っています。更にどう展開していくかは、若い皆さん、先生方に期待したいと思います。

伊藤：最後、宮崎先生にまとめていただいて終わりにしたいと思います。

宮崎：また乱すようで申し訳ないですが、石岡さんが言われた集団のマネジメントと個人のレベルの問題は、結局は社会自体の発展と個人の発達の関連をどういうふう結び付けて考えるのかというものすごく大きな問いのような気がします。今日はどちらかというと石岡さんと私は、社会の開発とか発展という視点から述べて、他の皆さんは個人のレベルから発達を述べられ、実は両者はリンクしているんだということが今日明らかになったと思うんです。あるいは、結び付けて考える可能性があるし必要性があるのではないかということが見えてきた。そんな議論はこれまでも何度もあったところと言えばそうなのですが、哲学的なレベルというよりも「実証主義者」の加藤さんがきちっとデータを示してくれたわけだし、皆さんもデータを持って議論されて（私のだけが違いましたが）、この間の教育学、あるいは心理学、社会学にかかわる学問的到達点を、もう一度個人の発達と社会の発展という手あかにまみれたかに見えるフレームに入れてみたときに新しい意味づけができるのではないか。それがどんなものを生

み出すのかまだわからないですけど、例えば今日出てきたいろんな理論家、ワロンやピアジェ、マルクスなどが出てきましたけれども、ヴィゴツキーも当然その中にいるわけですよ。ですが、それぞれ縦割りになって議論されてしまって、ピアジェ学派、ヴィゴツキー学派、マルクス学派というのはいないかもしれませんが、分断されている。けれども今言った個人の発達と社会の発展を統一的に捉えるフレームがもしできるとしたときに、それぞれの理論家の営みがどんな意味を持っていたのかということについて、我々、北大教育学部なりの新しい読み込み方ができて、日本の教育学のみならず世界的にも新しい問題提起ができる可能性があるのではないかという夢物語かもしれないけれど、そんな気が少ししています。いまだにそんな議論をしているのかと言われるかもしれませんが、もう少しこの方向で努力してみてもいいのではと思っています。賭けみたいなのというところもあるかもしれませんがね。そういう手がかりが得られたということで私自身は一步前進したのかなと思っています。どうもありがとうございました。

伊藤：長い時間にわたりまして、シンポジウムを行ってまいりましたけれども、今日はこれで終わりにしたいと思います。また、多分こういうような形でのシンポジウムは継続して来年度も行われると思います。是非ご参加頂きたいと思います。ご登壇者の先生方へもう一回拍手をお願いいたします。